

## 弟からの贈り物

相原潤

ぼくの名前は相原潤。またの名は、潤ちゃん。またの名は、相ちゃん。他にもいくつかある。お父さん、お母さん、友達、みんながいろんな場面にいるような名前。僕のことを呼ぶ。ぼくは自分の名前が大好きだ。その中でも特にお気に入りに入りの名前がある。

ぼくには、四才年下の弟がいる。弟は、ぼくより早起き。毎朝、ぼくのことを起こしてくれ。ぼくは眠くて、なかなか目も開けられないのに、早起きして朝早くから元気な弟はとてもらいと感心する。朝早くから、次々手伝いをしている弟は一体何者なんだろうとおどろくこともある。朝から忙しそうに走り回る弟を見て、なんだかぼくの方が朝から少し疲れることもある。

毎日、ぼくが朝ごはんを食べた後、

「はい、潤ちゃん、今日の。」

と着替えを持ってきてくれる。弟は、ぼくが着る服をその日の気分に合わせて選んでくれる。ぼくに似合う服を選んでくれていたようだ。取りに行く手間も省けて楽ちんだ。それになかなか組み合わせが上手い。でも時々、選んでくれた服を着ておどろくことがある。赤いティーシャツに黄色いズボン。元気いっぱいの組み合わせだ。お母さんが、「潤ちゃんのランドセルが緑色だから信号機の出来上がりだね。」

と笑つて言う。ぼくもすぐく楽しくなる。弟は恥ずかしそうに笑う。学校で自分の服を見る度に弟の恥ずかしそうな笑顔を思い出す。

時々学校で弟に会うことがある。家で見ている弟とちがつて少し大人っぽい。学校で出会った時には、

「よお、にいちちゃん。」

と呼んでくる。初めてそう呼ばれたときはおどろいた。でもぼくは、こんな風に時々「にいちちゃん」と呼ばれるのがうれしい。これがぼくの特にお気に入りのお名前だからだ。ぼくににいちちゃんという名前をくれたのは弟だ。ぼくにこの名前ができたのは、弟が生まれてきてくれたから。この名前の時にはぼくはいつもよりがんばれる。弟がもつと小さいころ病気をして病院に行っている間、おじいちゃんがぼくの手を握って一緒にいてくれた。

「潤ちゃんは、にいちちゃんだね。」

と言ってくれた。初めて留守番する時、お母さんは、弟に

「直ちゃん、にいちちゃんの言うこと聞くんだよ。」

と言った。留守番の間、少しさみしかったのか、いつもより弟はぼくの近くにいた。だからぼくは、いつもより弟に優しくした。

ぼくの潤という名前はおばあちゃんがつけてくれたたった一つの宝物。ぼくとぼくの周りの人たちの心がいつでも潤い優しくいられるように願いが込められている。にいちちゃんという名前は弟がぼくに贈ってくれた。いつものぼくより、少し勇気がわく名前。ぼくと弟のふたりの宝物。すてきな名前ありがとう。